



Title	「発明」の成立と展開
Author(s)	張, 梓旋
Citation	大阪大学, 2023, 修士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90741
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

本論文に関する説明

本論文は、大阪大学の機関リポジトリOUKAでまとめて公開している日中語彙交流に関する以下の修士論文（文学研究科 文化表現論専攻 日本語学専門分野）8編の1つです。

- 朱 曉平：近現代漢語接尾辞「者」の成立と展開（2018年）
孫 曉：「経験」の展開—日中両語間の相互影響と語義的変容—（2019年）
沙 広聡：接尾辞「性」の歴史—日中両語間の相互影響—（2020年）
崔 蕭寒：「摩擦」の語史—日中両語の相互影響—（2021年）
袁 書予：「分析」の成立と変化（2022年）
馮 玥：「反応」の語誌（2022年）
張 静怡：「中和」の成立と変遷（2023年）
張 梓旋：「発明」の成立と展開（2023年）

いずれも独自の発見や考察を多く含む力作で、未完成の要素もあるにせよ広く読んでいただけるよう各著者の了解を得て公開することにしました。

論文への言及時には、「大阪大学大学院文学研究科修士論文」とお書き添えいただければ幸いです。「大学院」の3字はなくても差し支えありません。

なお、朱曉平さんと崔蕭寒さんの修士論文については、主要部分を抜粋、改稿した論文が『或問』第33号（2018年）、第39号（2021年）にそれぞれ掲載されています。また、沙広聡さんの関連する論文が『東アジア国際言語研究』第2号（2021年）と『阪大日本語研究』34（2022年）に掲載されています。

田野村忠温
2023年3月

修士学位申請論文

「発明」の成立と展開

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程

文化表現論専攻 日本語学専門分野

学籍番号 20B21024

張 梓旋

要旨

本研究は、日中同形語である「発明」について、その成立、変化および日中両語間の相互関係を考察するものである。漢字文化圏として深く頻繁な交流が行われてきた日中両語において、数ある日中同形語のうち、「発明」は、学術用語としても日常語としても広く使用される語の1つである。そして現代語における「発明」は、辞典によると“新しいものを考え出す”や“賢い”を意味するようであるが、古典籍における「発明」は“悟る”や“説明・解釈する”の意味で多用される。このことから、この語は時代の流れとともに使用が変容していると思われる、その変化の様相を明らかにする必要があると考えた。

第2章では、「発明」の語史に関する先行研究を整理し、その問題点を述べ、本研究の位置づけを明確にする。

第3章では、日本語の古典籍における「発明」について、中国語と対照しつつ、調査を行う。古代日本語の「発明」の意味を分析した結果、“悟る”、“説明・解釈する”、“抽象的なものを作り出す”、“利発”が考えられた。そして、悟る”、“説明・解釈する”、“抽象的なものを作り出す”の意味の「発明」がそれぞれ古代中国語に見られ、“利発”は中国語から影響を受けた可能性がある。以上より、仮説のとおり、古典日本語の「発明」は中国語から伝来したものと考えられる。また、各意味の使用状況を把握するため、グーグルブックスを利用し、各意味の量的な分析も行なった。その結果、“説明・解釈する”、“悟る”がはるかに多く使用されていることが分かった。

第4章では、「発明」という語の成立を明らかにしたうえで、この語の展開について考察する。4.1 節では、幕末期の使用状況を見る。蘭学の興隆により、医学や物理学などの自然科学が発展し、新しい技術や装置の作成、自然界に存在する物質の新発見に関する文章が多い。それに伴い、“抽象的なものを作り出す”、“具体的なものを作り出す”、“発見する”ことを意味する「発明」が多く見られた。さらに、具体的な用例数を確認したところ、19世紀半ばに「発明」の使用が大きく変化することが分かった。4.2 節では、明治時代の「発明」について考察を行う。日本語歴史コーパスを利用し、明治時代の「発明」の用例数を確認したところ、西洋文明のさらなる吸収のため、数多の機械の製作に関する文章が見られ、“具体的なものを作り出す”という意味の「発明」が多いことが分かった。また、辞書を調査し、「発明」の訳語として主に *contrive*, *invent*, *discover*, *clever* の4語があること、1880年代になると *discover* が見られなくなることが明らかになった。さらに、明治時代の特徴として「発明者」や「新発明」のような複合語の出現がある。

第5章では、近代中国語、とりわけ日清戦争以降の中国語における「発明」の使用状況を見る。最も影響力がある新聞の『申報』、英華辞書および翻訳書を調査資料として、考察を行う。その結果、20世紀以降の中国語は日本語からの影響を受けており、「発明」の意味も古典中国語における「発明」と異なっていた。

第6章では以上の考察を踏まえ、日中両語間の交流の視点から「発明」という語の語史を説明する。

目次

1. はじめに	1
2. 先行研究および問題点	1
2.1 先行研究	1
2.2 問題点	1
3. 日中古典語における「発明」	2
3.1 「発明」の出自	2
3.2 古典語における「発明」	3
4. 日本語における「発明」の展開	7
4.1 幕末期の「発明」	7
4.1.1 蘭和辞書における「発明」	7
4.1.2 蘭学書における「発明」	8
4.1.3 まとめ	10
4.2 明治時代における「発明」	10
4.2.1 辞書における「発明」	10
4.2.2 書籍、雑誌における「発明」	13
4.2.3 「発明」に関する複合語	15
4.2.4 まとめ	17
4.3 古典から明治時代にかけての「発明」の変化	18
5. 近代中国語における「発明」の展開	18
5.1 『申報』における「発明」	19
5.2 辞書における「発明」	20
5.3 訳書における「発明」	23
5.4 まとめ	24
6. 「発明」をめぐる日中両語間の相互影響	24
7. おわりに	26
参考文献	27
「発明」年表	28
(A) 日本語資料における用例	28
(B) 中国語資料における用例	29

1. はじめに

「発明」は、日中両語のどちらにおいても学術、日常生活でよく使われている語の1つである。『三省堂国語辞典 第八版』(2022)を参照したところ、現代日本語の「発明」は主に“機械・装置・やり方などをはじめて考え出すこと。また、かしこいようす”の意味を持つようである。

しかし、遡って全体の語史から見ると、現れるのはこの2つの意味だけではない。“発見する”や“悟る”などの意味を持つ「発明」も見られ、この語の意味が変化したとわかる。

「発明」に関する先行研究は少なくないが、全体の語史を考察する研究は見られない。このことから本研究は、従来の考察を踏まえ、日中両語における「発明」という語の成立、通時的变化および両語間の相互関係について考察することを目的とする。

2. 先行研究および問題点

本節では、まず「発明」に関する先行研究を紹介する。次に、それらの先行研究の問題点を述べ、本稿の意義を示す。

2.1 先行研究

「発明」に関する先行研究はいくつがある。渡辺(1930)は法律用語に着目して分析を行った。「発明」は元々“発意明驗”の意味であり、新規なる発明と既存の事柄を明瞭にするという2つの概念を包摂する語辞である。

惣郷ほか(1986)は、明治時代の辞書を考察し、近世には“利口・利発”の意味で多く用いられることを指摘した。幕末から、英語の *invention* と *discovery* の訳語として用いられ、やがて *discovery* は「発見」と訳されるようになったという。

山田(1999)は、幕末の辞書を調査し、「発明」と「発見」を対照するかたちで考察を行った。「発明」はもともと“知恵のある、賢い”の意味であり、現代の「発見」の意味も含め、主として物の創造について言及するという。

高野(2004)は、明治時代の「発明」と「発見」は明確に区別されていないことを指摘した。そして、木村(2008)も「発明」と「発見」を区別せずに考察した。「発明」は漢籍に見られるものと述べる。さらに『日本国語大辞典』における「発明」の分類について、例を挙げつつ解説し、対象語によって4つ分けた。具体的には、「物事の道理や意味」、「理論や方法」、「未知の物事、原理や法則。土地」、「機械、器具類。それに関する技術」である。

馮(2004)は中国語の「発明」の初出は『風賦』であり、古代中国語における「発明」は“賢い”、“説明”、“裏付け”の意味であり、近代になると、中国語は日本語から影響を受けたと指摘した。

2.2 問題点

以上の先行研究の主張は以下の3点に整理できる。1点目は、「発明」の出自は中国語で

あるということである。2 点目は、「発明」の先行研究は、おおよそ幕末や明治時代に注目しているということである。3 点目は、「発明」は「発見」の意味も持つということである。

このような「発明」に関する先行研究には問題点があり、さらなる検討の余地があると考える。まず、先行研究は幕末期と明治時代に注目する傾向があり、語史全体に対する考察は未だ不足していることである。また、辞書に着目することが多く、具体的な用例への分析が少ないことである。そして、「発明」それ自体を詳細に分析する研究ではなく、「発見」と対照させるかたちでの研究が多いことである。そこで本研究では、これらの問題点を補充するため、従来の考察を踏まえつつ、日中両語における「発明」という語の成立、変容および両語間の相互関係を考察する。

3. 日中古典語における「発明」

先行研究では、「発明」の初出は漢籍であり、日本語に伝播したと言及されることがある。しかしそれについて詳細には述べられていない。本節は「発明」の出自、古典語における意味および日中両語間の関係を、例を挙げつつ考察する。

3.1 「発明」の出自

先行研究より、「発明」の初出は中国古典籍の『風賦』である。そこで、筆者は CCL¹ を使用し、最も古い用例は『風賦』の「発明耳目」という文であることを確認した。

(1) 清清冷冷、愈病析醒、発明耳目、寧体使人。((風が)清涼で病気も治せ、酔いもさめる。 耳もよく聞こえ目もよく見える。身心安寧になれる。)

(宋玉『風賦』、戦国 (BC476—221))

馮 (2004) はこの用例の「発明」を“賢い”と解釈した。しかし、ここの「発明」は“明らかにさせる”の意味に近く、「発明耳目」は“耳と目を明らかにさせる”の意味であり、この「発明耳目」という文の派生意義こそ“賢い”の意味であると考えている。

また、『漢語大詞典簡編』(1998)を参考にして、「発」と「明」はそれぞれ多くの独自の意味を持っている。²

「発」: ①発射する ②出発する ③生長する ④発生する ⑤実行する ⑥開発する ⑦開啓する ⑧発掘する ⑨現れる ⑩表現する ⑪発散する ⑫公布する ⑬行動する ⑭発動する ⑮詰問する ⑯提出する ⑰解明する ⑱啓発する ⑲推挙する ⑳伝播する ㉑摘発する ㉒言い表す ㉓送り届ける ㉔燃やす ㉕派遣する ㉖発作 ㉗徴発

¹ CCL は北京大学より開発された中国語コーパスである。

² 原文は中国語で、筆者による日本語訳である。

する ⑳制作する ㉑演じる㉒立身出世する ㉓咲く ㉔源を発する ㉕表わす ㉖交付する ㉗遠流 ㉘発行する ㉙発酵する ㉚助数詞 ㉛「法」の通仮字

「明」: ㉜日と月の光 ㉝照らす ㉞光明 ㉟夜明け ㊱燃やす ㊲たいまつ ㊳明艶、鮮艶 ㊴わかる ㊵理解する ㊶明らか ㊷公開する ㊸証明する ㊹明察する ㊺心地光明 ㊻白昼 ㊼世間 ㊽厳正 ㊾清く明らかなこと ㊿尊崇する ㊽賢人 ㊾高明 ㊿目 ㊽良い視力 ㊾見分ける ㊿収穫 ㊽隆盛 ㊾清潔 ㊿神 ㊽次に ㊾副詞明白に ㊿「盟」の通仮字 ㊽「名」の通仮字 ㊾「勉」の通仮字 ㊿「萌」の通仮字 ㊽明の時代 ㊾姓

以上の意味を見ると、「発」と「明」はいずれも“賢い”の意味を持っていないため、「発明」の本義が“賢い”であるとは考えにくい。また、「明」の基本的な意味は“日と月の光”や“光明”などの「光」に関するものであることから、「発明」の本義は“光を発する”ではないかと推測する。

3.2 古典語における「発明」

日本語における漢語は中国語から大きな影響を受けたものであるため、漢語である「発明」は中国語から伝来した可能性が高いと推測する。しかし、具体的な用例を分析し、古典中国語の用例と対照したうえで、古典日本語における「発明」の使用状況を見ていく。

(2) 若シ已ニ有ハ発-明スルコト者可シ謂ツ如ク龍ノ得ルカ水ヲ似タリト虎ノ靠ルニ山ニ 此定力ニ依テ大 悟発明セハ、龍ノ水ヲ得ルカ如ク、虎ノ山ニ靠ルカ如ク、イヨイヨ靈氣ヲ増フソ。(もしすでに悟る者がいれば、水を得た龍のように、山に寄った虎のように(なれる)。注: この定力によって大悟をすれば、水を得た龍のように、山に寄った虎のようにいよいよ靈氣が増す。)

(万安英種『四部録抄』、1633(寛永 10) 年)

中国語古典籍には同じ用法の「発明」が見られる。

(3) 師入室咨決、罔替晨昏、又閱楞嚴、発明心地。(師備禪師は入室し、(修行の問題について他人と) 相談する。朝から夜まで。また『楞嚴經』を読み、心性を悟る。)

(靈隱寺普濟編『五灯会元』、南宋(1127-1279 年))

『四部録抄』は仏教の書籍である。仏教に関する「発明」は常に“迷いがなくなり、本心を悟る”を意味する。ここの「発明」は前の「大悟」と並列し、「大悟」と同じ意味であると考えられる。古代中国 13 世紀にはすでに存在した意味であり、中国由来だと考えられる。

(4) 学友問、格物致知の心法ハ古昔の経にもなく、孔聖の語にも見え侍らず、子思初て發明し給たるか。(学友が問う。格物致知という心法は昔の経書にもなく、孔子の言葉にも見え、先生が初めてお作りになったのでしょうか。)

(熊沢蕃山『集義和書』、1676 (延宝 4) 年)

上記の (4) における「發明」は“抽象的なものを初めて作り出す”意味であると思われる。同じく古典中国の書籍には同様の意味の「發明」が見られた。

(5) 孟子發明四端、乃孔子所未發。(孟子が「四端」という概念を作った。それは孔子が作らなかったものである。)

(黎靖康『朱子語類』、南宋 (1127～1279) 年)

このような用法は、儒教や道教に関する書籍で、“理論や思想を初めて作り出す”ことを意味する文に見られる傾向がある。これも古典中国語から伝播したと推測する。

(6) 二程ハ孟子ノ伝ヲツクトアルニ先輩モ疑ヒアルト見ヘタリ、周子ハ易道ヲ發明シテ、太極ノ図ヲ説テ、程子ニ授ラレタレハ道統ノ伝ニ周子程子ト受来リタルハ餘義ナキ事ナリ。(二程は孟子 (の理論) を伝承し、先輩にもあやしいところがあると見た。周子は易道をさらに解釈し、太極の図を説明して、程子に教えなされた。したがって道統の伝承が周子、程子と受け継がれたことは間違いないことである。)

(村上次郎右門衛『大学金籙抄』、1691 (元禄 4) 年)

(6) は (4) と混同しやすいかもしれないが、(4) がまだ存在しない、新しい思想を創造する意味であるのに対して、(6) の易道はすでに存在している理論である。周子は前人の成果に基づき、自分の考えを含め、『太極図説』を著し、易道をさらに解釈して発展させた。そこで、ここの「發明」は「説明・解釈する」と訳すことが適切であると考えられる。

(7) 臣聞『詩』『書』『礼』『楽』、定自孔子、發明章句、始於子夏。(『詩』『書』『礼』『楽』は孔子が決めたが、章句の説明は子夏から始まった。)

(范曄『後漢書』、432 年)

子夏は孔子の成果に基づき、『詩』『書』『礼』『楽』をさらに解釈した。ここの「發明」は (6) と同じ用法であり、しかも 400 年頃にすでに現れていた。また、(6) 自体は周易についての漢籍の抄である。そこで、「説明・解釈する」という意味は中国語から伝播した可能性が高いと考えられる。

また、この意味の「發明」には派生する用法があると思われる。

(8) (食塩) 気味 微辛-鹹寒無_レ毒 (味：少し辛鹹、寒涼性、毒なし)

主治 解_シ毒 (後略) (主治：毒を解する (後略))

發明 食-塩ノ之功-用詳ニ論_スル_トキハ_ニ于綱-目_ニ (後略) (發明：食塩の功用は『本草綱目』に詳しく論じる (後略))

(丹岳野必大千里³『本朝食鑑』、1695 (元禄 8) 年)

(8) は食塩に関する紹介である。ここの「發明」は「気味」および「主治」と同様、文中に現れたものではなく、見出しとして見られる。『日本大百科全書』(1984～1994 年)において、『本朝食鑑』は『本草綱目』に多分に依拠して作成されたものであると指摘がある。

(9) (目次) 身膚浮気 十五卷六六發明又廿七卷三二 (李時珍『本草綱目』、1596 年)

また、『福島県植物誌』(1987)によると、『本草綱目』の「發明」の部分は李時珍および諸医者本草家の薬効諸説である。以上のことから、(8)の「發明」は『本草綱目』の影響を受けており、“説明・解釈する”の意味から派生したものだと推測する。このような用法は医学分野でのみ見られるが、とはいえ必ずしもすべての医学著作に見られるものでもない。『本草綱目』の影響を受けた医学書籍にのみ見られる特殊な使用方法だと思われる。

(10) 腹帯の解けてほどけて世にこぼれ、生み広めにし人種の、次第次第に孫継ぎて、色の道には利發な町の小娘、若嫁の真似る芝居の女形、髪のかひぶり小利口にひつくるくるる廓様、今は向かぬと縫箔のそれにはあらぬ白の風、風呂の煙のたちいまで、姿似せれば、心もともに染まる。(神が) 腹帯がほどけて世にこぼれ落ちるように、産み広められた人類が次第に血筋を引き継いで、色の道には利發な町の少女や若嫁が真似る芝居の女形、髪のかいも小意気に、くるくると廓風の髪をして、(着物は) 今に向かない縫箔で白の風で、風呂(で働く人)の立居までも真似するから、心も一緒に染まる。)

(近松門左衛門『卯月紅葉』1706 (宝永 3) 年)

この意味は現代でも使用されている。先述の用法とは異なり、形容動詞であり、“利發”を意味する。“利發”は、日本語において作られた意味だと考えられる。まずは、この意味は中国語に対応している例が見られなかった。前述した「發明耳目」は「利發」と関係がありそうだが、同じ意味ではない。よって、この意味については中国語から伝来したものではない可能性があると考えている。しかし、中国語の意味と完全に一致する意味ではないとしても、全く異なる意味が突然生じたとは考えにくい。したがって、直接的に中国語が伝来し

³ 作者の本名は小野必大であり、野必大も名乗り、「丹岳」と「千里」は号である。

たわけではないが、間接的には中国語の影響を受けている、つまり中国語からの派生である可能性があると考える。また、『日本国語大辞典』(2002)では「発明」の語誌について、「もともとは道理などを明らかにして悟るという意味で、そこから聡明という意味を生じた」と述べられている。つまり、中国語から派生した意味であるとしても、“悟る”から派生した意味であるとしても、日本語において作られた意味だと考えられる。

ほかの意味はそれぞれ古典中国語に同じ意味の用例が見られた。しかも、いずれの書籍も漢籍の和刻本および漢籍をもとに書かれたものであるため、これらの意味は中国語に由来していると思われる。

ここでさらに、グーグルブックスを利用し、古代中国語漢籍を除いた18世紀までの籍を調査対象としたうえで、具体的なデータを見ながら、より詳細な「発明」の意味を把握していくこととする。50冊の書籍における「発明」の意味を統計する。膨大なデータ量ではないが、一定の使用状況は観察することができるとと思われる。

表1 古典籍の「発明」の使用

意味	数
悟る	26
説明・解釈する	46
抽象的なものを作り出す	5
	合計：77

上表より、“説明・解釈する”という意味が最も多いことが分かった。とはいえ“悟る”の数も少なくない。“悟る”は基本的に「心性」、「本心」などの仏教的な語と共起する。そのほか、「道理を発明する」⁴のように一般的な文脈で使用される例もゼロではない。“説明・解釈する”は儒教や道教に関する和刻本に多い。具体的には、先人がすでに創立した理論をさらに明らかにする意味を持つ。

“利発”の意味を表す「発明」はグーグルブックスには見られなかったが、日本語歴史コーパス CHJ にはいくつか例が見られる。特に人情本において会話の形式で出現するものが多い。したがってこの意味の「発明」は、会話で使用される傾向があると推測する。

3.3 まとめ

「発明」に関する最も古い用例は『風賦』の「発明耳目」という文であり、「発明」の出自は中国語であることがわかった。古典日本語は古典中国語からの仏典や儒学書を受け、仏典や儒学書に見られる“悟る”、“説明・解釈する”、“抽象的なものを作り出す”の意味の「発明」もそのまま古典日本語に伝えられた。また、日本語独自に“利発”を意味する「発

⁴ 「道理を発明する」は“道理がわかるようになる、道理を悟る”の意味である。

明」が作られた。これらの中で多用されるのは、“悟る”と“説明・解釈する”の意味である。

4. 日本語における「発明」の展開

18 世紀以降、日本はオランダをはじめとする西洋諸国から、西洋文明を積極的に受容した。明治維新を境に、オランダからの影響を受けた「蘭学」と、英語圏からの影響を受けた「洋学」とに分けられる。本章は幕末期と明治時代の 2 つの時期を考察し、18 世紀以降の「発明」について見ていく。

4.1 幕末期の「発明」

江戸時代に鎖国政策を実行した日本で、渡航が許可された唯一の西洋国家はオランダである。最初は貿易の往来であったが、徐々に学術の方面にも広がった。天文学や医学などの近代科学の洋書の翻訳と辞書の編集を通して、オランダを代表とする西洋諸国の文明は日本に伝わるようになった。本節は、蘭和辞書と翻訳書を考察し、蘭学での日本語における「発明」の使用状況を見る。

4.1.1 蘭和辞書における「発明」

ここで幕末期の主要な蘭和辞書および系譜について、永嶋（1970）をもとに説明する。

主要な蘭和辞書としてについて、『江戸ハルマ』、『長崎ハルマ』、『訳鍵』、『和蘭字彙』を挙げる。このうち、学問的蘭学の中心地・江戸で編纂された『江戸ハルマ』と、実用的蘭学を目指し編纂した『長崎ハルマ』は著しく対照的である。そこで、蘭和辞書は、この 2 冊の辞書に基づき、大きく江戸系と長崎系に分けられている。1810 年に刊行された、『江戸ハルマ』の縮抄版といえる『訳鍵』は、および『改正増補訳鍵』が江戸系の辞書だと言える。また、『和蘭字彙』は『長崎ハルマ』を底本として、極端な方言をやわらげることを目的に編集された長崎系である。蘭和辞書の系譜を整理すると、以下のようになる。

江戸系：『江戸ハルマ』（1796）——『訳鍵』（1810）——『改正増補訳鍵』（1857）

長崎系：『長崎ハルマ』（1833）——『和蘭字彙』（1858）

『江戸ハルマ』と『長崎ハルマ』を調べると、いずれにおいても「発明」は見られなかった。『訳鍵』にも「発明」はない。しかし、1857 年に出版された『改正増補訳鍵』と 1858 年に出版された『和蘭字彙』には「発明」が見られ、それはオランダ語の *uitvinden* に対応する。*uitvinden* の意味は後述する。

いずれの系譜においても、1850 年代の辞書に「発明」が収録されていた。このことから、1830 年代から 1850 年代までの間に、当時の日本語に「発明」の使用が広まるのだろうと推測する。

次に、『改正増補訳鍵』と『和蘭字彙』における「発明」の訳語である *uitvinden* の当時の意味を説明する。*A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages* (1857)における、*uitvinden* の見出し語は以下のとおりである。

Uitvinden, w⁵, to find out, discover, invent, contrive.

しかし、時代の流れとともに、英単語の意味も変容した可能性があるため、その時期の英英辞典、*The Comprehensive English Dictionary* (1864) を用い、上記の各英単語の意味を確認する。

Discover, to uncover, to bring to view something before unseen or concealed, to make known, to have the first sight of, to obtain the first knowledge of

Invent, to devise something not before known, to forge, to frame by the imagination

Contrive, to frame or devise something, to wear out

辞書の解釈から、*discover* は今まで見られなかったものを知るようになること、*invent* は存在しないものを考え出すこと、*contrive* はものを作ることがわかった。幕末期の「発明」は“発見する”を含むが、現代日本語の意味にかなり近づくと見られる。

4.1.2 蘭学書における「発明」

ここでは、幕末期の自然科学分野の書籍における「発明」の意味を考察する。

(11) 既ニ発-明シ水之原ヲ於酸-質與水-質、更ニ極テ精巧分-析之ヲ審其以テ酸質八十五分與水質十五分合シテ為水。(水のもととは酸素と水素であるとすでに発見した。さらにこれを精巧に分析し明らかにする。それ(前述したある方法)を用いて、85%の酸素 15%の水素を合わせて水にする。)

(青地林宗訳『気海観瀾』、(1827 (文政 10) 年)

(12) ^{ウ ル ス テ ン ド}務爾斯的度別種ノ^{ガ ル バ ニ キ}瓦爾華尼機ヲ発明シ、第九図ノ如シ。(務爾斯的度は別の種類の^ガ瓦

⁵ オランダ語には動詞英語の V に似ている

ルバニキ
爾華尼機を作り出した。図 9⁶のようである)

(宇田川榕庵訳『舎密開宗』第 2 巻、1837 (天保 8) ～1847 (弘化 4) 年)

(13) 此ハ刺先生、千七百八十年第三月ノ發明ニシテ、全燐酸ヲ製造スル法ナリ。(これは刺先生⁷が 1780 年の 3 月に作り出した全燐酸を製造する方法である。)

(宇田川榕庵訳『舎密開宗』第 3 巻、1837 (天保 8) ～1847 (弘化 4) 年)

以上の挙げられた例のように、幕末期の自然科学分野の書籍には“発見する”、“抽象的なものを作り出す”および“具体的なものを作り出す”の意味が見られた。

以下の表 2 は、異なる分野での「発明」を持つ各々の意味の数を確認し、使用状況を見るものである。

表 2 幕末期の書籍における「発明」の意味

資料	分野	意味	用例数
『暦象新書』	物理学	発見する	4
『遠西観象図説』	物理学	発見する	1
		抽象的なものを作り出す	1
『気海観瀾』	物理学	発見する	1
『算法天生法指南』	数学	抽象的なものを作り出す	3
『遠西医方名物考』	医学	発見する	1
		抽象的なものを作り出す	5
『和蘭藥鏡』	医学	発見する	1
『舎密開宗』	化学	発見する	24
		抽象的なものを作り出す	7
		具体的なものを作り出す	4

表 2 から、以下のことがわかる。幕末期において、自然分野の書籍に見られた「発明」の主な意味は、“発見する”と“抽象的なものを作り出す”である。また、この時期に、“具体的なものを作り出す”の「発明」は 4 つしかない。“具体的なものを作り出す”は主要な



⁶ 図 9 はこのように示す。

⁷ 刺先生とは、刺暉西而 (ラホイシール)、フランスの化学者ラボアジェのことである。

意味ではないと考える。それは、当時、自然科学は発展の初期であったため、新しいものを作り出すよりも、すでに存在したものや規律を発見するほうが多く、また機械などの具体的なものを作るより理論などの抽象的なものを作るほうが多いと思われるからである。

4.1.3 まとめ

幕末期は西洋との交流が始まり、1850 年代の蘭和辞書における「発明」はオランダ語の *uitvinden* に対応する。古典からすでに存在していた「発明」は新しい概念を表すため、新たな意味を与えられた。“発見する”、“具体的なものを作り出す” という意味が見られ、“抽象的なものを作り出す” ことを意味する「発明」は以前より頻繁に使われた。つまり「発明」の持つ意味が変化した。

4.2 明治時代における「発明」

明治時代になると、蘭学の代わりに、英語圏の文明の受容が主流になった。本節では、辞書を調査し、明治時代の書籍や雑誌を収録したコーパスも用いながら、明治時代の「発明」の使用状況を把握する。

4.2.1 辞書における「発明」

まず、この時代の英和／和英辞書の「発明」を考察する。以下の表 3 が示しているようである。

表 3 英和／和英辞書における「発明」

年代	辞書	編者	英語	日本語
1862	『英和对訳袖珍辞書』	堀達之助	Contrive	企テル 考へ出ス <u>発明</u> スル 謀ル
			Contriver	企テル人 <u>発明</u> スル人
			Discover	<u>発明</u> スル 見出ス
			Discoverable	発明サレルベキ 明白ナル
			Discoverer	発明スル人
			Discovery	発明
			Invent	<u>発明</u> スル 考エ出ス 作ル
			Inventer Inventor	<u>発明</u> スル人 考エ出ス人
			Invention	発明 発明シタル物

			Inventive	發明多キ
1873	『附音挿図英和字彙』	柴田昌吉 子安峻	Contrive	創造ス <u>發明</u> スル 看出ス 企ツル 始計ム
			Contrived	創造シタル <u>發明</u> シタル 始計タル
			Contriver	始計者 <u>發明</u> 者 創造者
			Discover	看出ス 看破ル <u>發明</u> スル 顕ス 想出ス
			Discoverable	看出スベキ <u>發明</u> スベキ 顕明ナル
			Discoverer	看出者 <u>發明</u> 者
			Discovery	看出 <u>發明</u> 看破 顕明
1874	『広益英倭字典』	田中正義 中宮誠之	Contrivable	考へ出スベキ <u>發明</u> スベキ
			Contrivance	<u>發明</u> 技芸 偽計 計作
			Contrive	企テル 考へ出ス <u>發明</u> スル 謀ル
			Contriver	企テル人 <u>發明</u> スル人
			Discover	<u>發明</u> スル 見出ス
			Discoverable	<u>發明</u> スベキ 明白ナル
			Discoverer	發明スル人
			Discovery	發明
			Invent	<u>發明</u> スル 考へ出ス作ル
			Inventful	發明多キ
			Inventer Inventor	<u>發明</u> スル人 考へ出ス人
			Invention	發明 發明シタル物
			Inventive	<u>發明</u> アル オアル
			Inventress	發明スル女

1879	『英華和訳字典』	W.Lobscheid (ロプシャイト) 原著 津田仙 柳澤信大 大井鎌吉	Discoverer	ミダスヒト ミツケ ダスヒト <u>ハツメイ</u> シャ
			The discovery of gold	キンノ <u>ハツメイ</u>
1881	『哲学字彙』	井上哲次郎	Invention	<u>発明</u> 発創 ⁸
1885	『英和和英字彙大全』	市川義夫	Contrive	創造スル <u>発明</u> スル 看出ス 謀ル
			Contrivable	謀ルベキ 創造スベ キ <u>発明</u> スベキ
			Contrivance	計策 創造 <u>発明</u> 方 略
			Contrived	創造シタル <u>発明</u> シ タル 始計ミタル
			Contriver	始計者 <u>発明</u> 者 創造 者
			Discover	看出ス 看破スル <u>発</u> <u>明</u> スル 顕ハス 想ヒ 出ス
			Discoverable	看出スベキ <u>発明</u> ス ベキ 顕明ナル
			Discoverer	発見者 <u>発明</u> 者
			Discovery	看出 <u>発明</u> 看破 顕 明
			Inventer	創製者 <u>発明</u> 者
			A new invention	新発明
1896	『和英大辞典』	F.Brinkley (ブ リンクリー) 南條文雄 岩崎行親	Invention Intelligent Clever	Hatsumei 発明
1903	『新英和辞林』	長谷川方文	Invent	<u>発明</u> スル 見出ス 思 ヒ付ク
			Inventor	<u>発明</u> 者 案出スル人

⁸ 発は「はじめる」の意味であり、読み方は「そう」である。

			Invention	発明 案出 工夫
1909	『英和辞典：新訳』	井上十吉	Invention To invent Clever Intelligent Sagacious	Hatsumeï 発明

桜井（2011）は、『英和对訳袖珍辞書』は『和蘭字彙』という蘭日辞典といくつかの英蘭辞典を利用したと実証した。そこで、『英和对訳袖珍辞書』における *contrive, discover, invent* の訳語である「発明」は『和蘭字彙』から継承した可能性がかなり高い。『英和对訳袖珍辞書』は近代日本語に重要な地位を占める辞書であり、後世の英和辞書にも影響を与える。そこで、明治時代の英和辞書における訳語である「発明」は幕末期の『和蘭字彙』まで遡られると言える。

また、1881 年に出版された『哲学字彙』は境であると言えると思われる。『英和对訳袖珍辞書』（1862）、『附音挿図英和字彙』（1873）、『広益英倭字典』（1874）、『英華和訳字典』（1879）、いずれの *discover* は「発明」と対応している。この頃の「発明」には“発見する”の意味が含まれるということがわかる。しかし、『哲学字彙』（1881）で *discover* および *discover* の派生語は「発明」と対応していない。その後出版された辞書においては、*discover* と「発明」が対応していることが見られる場合もあれば、見られない場合もある。そして、20 世紀になると、見られない辞書が圧倒的に多くなる。そこで、先行研究で言及されていた『発明』には“発見”の意味も含まれる」という現象は、明治後期には徐々になくなったと考えられる。

4.2.2 書籍、雑誌における「発明」

次にそして、コーパスを利用し、明治時代の書籍や雑誌における具体的な用例を見ていく。

CHJ（日本語歴史コーパス）を利用し、明治時代以前の用例を除いた、合計 15 冊の作品⁹481 例における「発明」の意味を分類した。統計の結果は表 4 に示す。

表 4 明治時代の書籍、雑誌における「発明」

意味	用例数
悟る	28
説明・解釈する	18
抽象的なものを作り出す	117

⁹ 同じ作品であれば、複数巻にわかれていても一つの作品と統計する。例えば、『太陽』の「電気と技術との関係」巻と「工業世界」巻は同じく『太陽』として扱う。

具体的なものを作り出す	240
発見する	69
利発	4
判断しにくい	5

以下、例を挙げつつ説明していく。

(12) 御家流と言のを一番能と為ます。政府で用る書法で全日本人の発明為た流儀だそうです。(御家流というのは一番流儀であるとされます。政府が用いる書法で、全日本人がわかっている流儀だそうです。)

(アーネスト・サトウ『春秋雑誌会話篇』第2冊、1873(明治6)年)

例(12)のように、明治時代の「悟る」は仏経分野の意味とやや異なり、“分かる”に近いと考えられる。

(13) 長寿な人、富貴な人、慈悲ある人、博学な人、発明な人文明開化の人にあやかる様に心掛るが肝要でござる。(長寿な人、富貴な人、慈悲のある人、博学な人、利発な人は文明開化の人にあやかるように心がけるのが最も重要である)

(加藤祐一『文明開化』、1874(明治7)年)

(14) 天下ヲ治メル制度典章ハ法ト云フガ後世ノ発明丈宜イカと存スルデゴザル。(天下を統治している制度典章は「法」というのが後世のさらなる良い説明としてある。)

(西周『百一新論』、1874(明治7)年)

例(14)の「発明」は“抽象的なものを作り出す”と混同しやすいかもしれない。この例は後世が制度典章を「法」と名付けたということである。これはすでに存在した制度典章をさらに発展させ説明するという意味であるため、「説明・解釈する」の意味がより適切だと思われる。

(15) 牛董ハ林檎ノ落ルヲ見テ重力ヲ発明ス。(ニュートンはリンゴの落下から重力を発見した。)

(阪口素「養精神一説」、『明六雑誌』40号、1875年)

(16) 近頃恰モ酸化金属ヲ還元スルガ如ク湖海ノ浩坑ヨリ炭素ヲ以テ水素ヲ採集スルノ法ヲ発明セリ。(最近に酸化金属を還元するように、ちょうど湖海の鑛坑にある炭素を用いて水素の採集する方法を発明した。)

(作者不明「水ヲ燃料ニ供スル説」、『東洋学芸雑誌』第2号、1881年)

(17) 前世紀の終わり、今世紀の始め、ワットが蒸気機関の発明よりして経済世界の大変動を起し、機械の勢力増して人間の労力其価を落とし、一転して資本家の不景気となり。(前世紀の終わり、今世紀の始めにワットが蒸気機関の造成により、経済の大変動を起し、機械の勢力が増し、人間の労働価値を落とした。一転して資本家が不景気になった。)

(作者不明「英米不景気の一斑」、『国民之友』31号、1888年)

意味が判断しにくい「発明」が5つあるが、いずれも複合語の語幹としての「発明」であるため、次節の「発明」に関する複合語の部分で述べることにする。

以上の用例からみると、明治時代には“悟る”、“説明・解釈する”のような古典語から存在する意味も見られる。一方、“発見する”、“抽象的なものを作り出す”、“具体的なものを作り出す”といった、近代科学分野の文脈で見られる意味もある。“抽象的なものを作り出す”という意味は、古典にも見られたが多くは使用されておらず、儒教学に用いられるものであったため、明治時代のそれとは異なる。そこで、筆者は“抽象的なものを作り出す”を含めこれらの意味は新しい意味であり、「近代的な意味」と呼ぶことにする。これに対する“悟る”と“説明・解釈する”の意味は「古典的な意味」と呼ぶ。

表4のデータから、“具体的なものを作り出す”と“抽象的なものを作り出す”の意味の使用は圧倒的に多いとわかった。とりわけ、明治後期に流行した『太陽』には“具体的なものを作り出す”という意味がはるかに多い。このことから、前述した、「発明」の“発見する”という意味が徐々になくなったことが裏付けられる。

4.2.3「発明」に関する複合語

明治時代以降、「発明」を用いた複合語が見られる。なかでも、「新発明」と「発明者」が多い。「大発明」や「発明品」もしばしば見られる。以下で、複合語における「発明」の意味を考察する。

発表者の調査の限りでは、「発明」に関する複合語の初出は以下のようなものである。

(18) 発明館 国内軍務宰相ノ主ル所ニシテ、一切ノ事物ヲ創造スルコトアレバ、初メハ極メテコレヲ秘シ微細ニコレヲ書記シ或ハ雛形ヲ以コノ館ニ呈ス、則諸官相会合シテ、コレヲ検査シ遂ニコレヲ試験ス、其試験ニテハ各々其職掌ニ帰ス、ハ事軍務ニ関レハ軍事宰相コレヲ検査スルノ類ナリ。(発明館 国内軍務宰相が管理するところであり、あらゆる物事を創造するところであるので、初めのうちは徹底してこの物事に関する情報を秘密にし、詳細に書記し、あるいは雛型をこの館に呈する。そして、諸官相は会合して、これを検査して試験する。その試験は各々の職掌の人に任せる。例えば、軍事に関する物事であれば、軍事宰相の検査である。)

(福沢諭吉輯『西洋事情 付録』、1868(明治元)年)

上記の文章から、「発明館」は創造した新しい物事を提出する場所であることが分かった。ここの「発明」は“具体的なものを作り出す”という意味であると考えられる。しかし、この「発明館」という語はあまり見られない。『西洋事情』は福沢諭吉が欧米を紹介する本であり、中には、福沢による造語が多い。「発明館」が普及していないのは、おそらく個人的な造語で、一般的に使用されないためであろう。

日本語歴史コーパス (CHJ) を利用し、「発明」に関する複合語をさらに見ていきたい。なかでも最も多く見られた「発明者」を取り上げ、「発明者」における「発明」について分析する。結果は表 5 のように示す。

表 5 「発明者」における「発明」の意味

「発明者」における「発明」の意味	数
抽象的なものを作り出す	6
具体的なものを作り出す	27
発見する	1
判断しにくい	5

各「発明」の意味ごとに、以下、例文を示す。例文 (19) は、“抽象的なものを作り出す”の意味で、(20) は“具体的なものを作り出す”で、(21) は“発見する”であり、(22) の「発明」の意味が判断されにくい。

(19) 史記ニ商鞅ガ孝公ノ臣ト議論スル所ニ、礼ト法トヲ交テ互ヒニ挙テゴザルガ、即チ爰ノ意デゴザル。偕其法ト云フ字ヲ専ラニ己ノ流儀ノ名ト致スノハ、申不害商鞅ナドヲ発明者ト見ルコトト見エテゴザル。(史記の、商鞅が孝公の臣下と議論するところで、礼と法を混ぜて互いに挙げているが、これは即ち緩めの意味である。さて、その「法」という字をもっぱら己の流儀の名とするのは、申不害、商鞅などを開創者とみることによると思われる。)

(西周『百一新論 卷之上』、1874 (明治 7) 年)

(20) 軽気球の最初の発明者は佛蘭西のモンゴルヒー氏である。(軽気球の最初の作り手はフランスのモンゴルフィエ氏である。)

(冶雷町人「軍用軽気球」、『太陽』第 7 巻第 3 号、1901 (明治 34) 年)

(21) ナルサー、ハンフレー、デーヴィー氏 ((ポツタシヤム) 及び (ソディヤム) ノ発明者) (ナルサー、ハンフレー、デーヴィー氏 (ポタシウム及びソディウム¹⁰の発見者))

¹⁰ ポタシウムは化学元素カリウムであり、ソディウムは化学元素ナトリウムである。

(ジョンダルトン「西哲叢談」、『東洋学芸雑誌』第4号、1882(明治15)年)

(22) 人ハ曰ク、黒奴ハ世界最劣等ノ人種ナリト。雖然見ヨ此英国白奴ハ、彼ノ英国海島ノ城堡トナリ、星旗ヲ宇内ニ輝カシムル数多ノ学者、詩人、哲者、政治家、商人、発明者ヲ造出スルー材料タルニ過キササルニ非ズヤ。無学賤陋終生奴隸ノ生ヲ送り、貧苦辛窮以テ空ク世ヲ逝クニ非ラズヤ、夫レ彼亦人ナリ。(黒人は世界で最も劣等の人種と言う人がいる。しかしイギリスの白人は英国という海島の要塞となり、星旗を世界に輝かせる多くの学者、詩人、哲学者、政治家、商人、発明者を創出した1つの材料に過ぎないではないか。無学で身分が賤しい終身の奴隷の人生を送り、貧苦で辛勞に空いて死ぬべきではない。彼らも人間である。)

(池本吉治訳「人之権利」、『国民之友』第3号、1887(明治20)年)

なお、例(22)は4.2.2で言及した判断しにくい「発明」の1つである。ここの「発明」は(19)と(20)のように“新しいものを作り出す”を意味する可能性がある一方で、(21)のように“発見する”を意味する可能性もある。ここの「発明者」は、今まで知らないものを見つけた、または新しいものを作った、近代科学に貢献があった人の総称だと理解すれば相違ないであろう。

表5から、古い意味の“悟る”と“説明・解釈する”の意味は見られないということになる。そこで、複合語は近代から作られるようになったものだと考えられる。また、複合語の出現は1890年代以降に集中する。前述した「発見」と「発明」の混用現象も、この時期に徐々になくなっていく。このことから、「発明」の複合語において“新しいものを作り出す”が主要の意味であり、“発見する”がほぼ見られないのだと考える。

また、「新発明」について、「発明」という語自体に“新”の意味が含まれているので、「新発明」は重言表現と考えられる。それにもかかわらず“新”をつけて強調するのは、“すでに存在したもの”と区別する、つまり、“発見する”と区別するためではないかと推測している。

4.2.4 まとめ

明治時代になると、西洋との交流がますます深まった。「発明」の意味も時代とともに、近代的な意味である“抽象的なものを作り出す”、“具体的なものを作り出す”および“発見する”が多くなった。古典日本語と対照したところ、「発明」の主要な意味は完全に異なっていた。また、辞書の考察の結果として、幕末期の蘭和辞書と英蘭辞書から影響を受けたため、幕末期の辞書と同じく *contrive, discover, invent* に対応することが分かった。1880年代以降、*discover* との対応は次第になくなった。

明治時代には複合語も出現した。1890年代以降に集中するため、複合語の「発明」の意味には近代的な意味が多いが、“発見する”の意味は少数である。

4.3 古典から明治時代にかけての「発明」の変化

「発明」の出自は中国語であり、“説明・解釈する”、“悟る”、“抽象的なものを作り出す”という意味を持ち、これらの意味は仏典や儒学書とともに古代日本語に伝播した。これに対し“利発”は、日本語において作られた意味だと推測する。

幕末期には、自然科学の発展の影響を受け、“発見する”、“抽象的なものを作り出す”および“具体的なものを作り出す”を主要な意味として持つようになった。そして、明治時代には、「発明」の意味における主要な意味が明らかに変化した。

以下の図1が示すように、かつて主要な意味であった“説明・解釈する”と“悟る”は、科学の発展とともにかなり減っている一方、“抽象的なものを作り出す”の意味は急増し、“具体的なものを作り出す”と“発見する”も多く使われている。

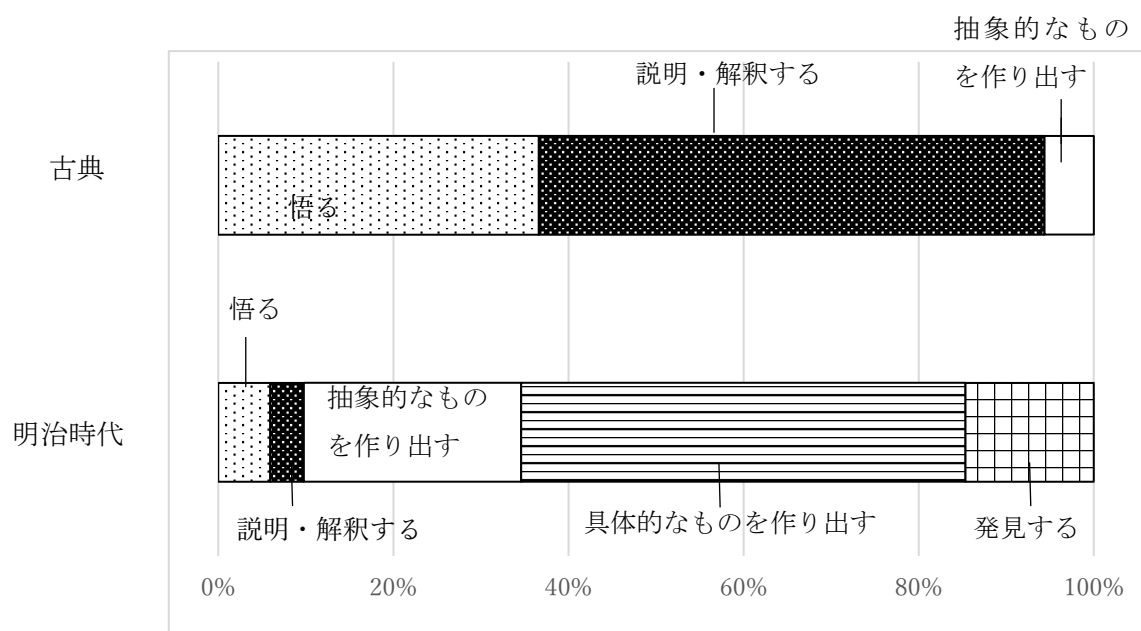


図1 古典と明治時代における「発明」の使用変化¹¹

また、幕末期に始まった発見との混用現象は、20世紀の明治後期に、徐々になくなり、現代日本語の「発明」とさらに近づく。

5. 近代中国語における「発明」の展開

陳（2019）は、1880年前後は中国語から日本語への伝播が停止し、日清戦争以降は日本語が中国語に影響を与えはじめたと述べた。そこで、本節は1880年から日清戦争以降にかけて近代中国語の新聞、辞書と書籍、その他刊行物における「発明」の使用状況を考察する。

¹¹ 図1は表1と表4のデータに基づき作られる。

5.1 『申報』における「発明」

『申報』は近代中国に強い影響力を持つ新聞である。本節は『申報』における「発明」の使用状況を調査し、日本語からの影響を受けたか否かを分析する。

中国語は、日清戦争以降は日本語から大きな影響を受けている。そのことから、筆者は日清戦争の前と後とで顕著な違いがあるのではないかと推測した。しかし、結果をみると、そうではない。『申報』を創刊した 1872 年から 1904 年にかけて、「発明」の出現数に大きな変化は見られなかった¹²。各年の出現数はほぼ 15 個ぐらいである。そこに見られる「発明」は、古代的な意味のものが多く、以下のようなものである。

(23) 発明説文之義者自南唐徐鍇。(説文解字の意味を解釈するのは、南唐の徐鍇からである。)

(鴻宝齋書局啓「説文解字彙纂」、『申報』第 5356 号、1888 (光緒 14) 年)

(24) 影戲灯片 此非玩物也、外国举凡天下所有之物皆絵図懸、諸書塾指教孩童藉以発明性理。(影戲灯片 これは遊ぶものではない。外国のすべてのものを懸紙に描き、諸塾は(これを使用して) 子供を教育し、性理を悟らせる。)

(中西大藥房「影戲灯片」、『申報』第 6976 号、1892 (光緒 18) 年)

つまり、日本語の「発明」に明らかな変化を起こした 19 世紀後半だが、中国語においては、「発明」はまだ古代的な意味が主流であることが分かる。しかし、1905 年以降、「発明」の使用が急増し、100 以上の例が見られた。しかも、“抽象的なものを作り出す”と“具体的なものを作り出す”、つまり、近代的な意味が多くなる。

(25) 本社新発明一種戒煙糖片、其味可口。(本社は一種のアヘン煙がやめられる糖片を新しく作り出した。その味は美味しい。)

(済春社「一心戒煙糖片広告」、『申報』第 11905 号、1906 (光緒 32) 年)

(26) 鐵 自発明鑄鐵法之後、凡鎗刀各物、無不用之。(鉄 鑄鉄法を作り出した後、鎗や刀など 各物には使用する。)

(江蘇教育總會移蘇垣事務所「雜俎」、『申報』第 12298 号、1907 (光緒 33) 年)

1905 年から変化した原因としては、以下の 2 点が考えられる。1 点目は、陳 (2019) によって明らかにされた、20 世紀以降、中国人留学生による日本書籍の翻訳作業が高潮に達し、日本語からの新しい表現も大量に現れたことである。2 点目は、科举制を廃止し、儒学

¹² 「発明」の出現数は、重複の例文がある。それらは 1 つの例として数えることとする。

の学習の取りやめとともに、古代的な意味が少なくなったと思われることである。また、“発見する”の意味はほぼ見られないが、それは、中国に伝播した20世紀において、すでに日本語の「発明」において“発見する”の意味が徐々になくなっており、中国語に伝わるに及ばなかったからであろうと考えられる。

5.2 辞書における「発明」

次に、英華／華英辞書を調べてみる。結果は表6の通りである。

表6 英華／華英辞書における「発明」

年代	辞書名	編者	英語	中国語
1822	『英華字典』	R.Morrison (モリソン 馬禮遜)	Illustrate or explain clearly	発明
1844	『英華韻府歷階』	S.W.Williams (ウィリアムズ 衛三畏)	Illustrate	発明
1847-48	『英華字典』	W.H.Medhurst (メドハース 麥都思)	To bring to light Dawn To display To expose To illustrate Refulgent To shine To brighten To clarify	発明
1865	『五車韻府』	R. Morrison (モリソン 馬禮遜)	To illustrate To bring to light To explain	発明
1866-69	『英華字典』	W. Lobscheid (ロブシヤイト 羅存徳)	To bring to light Dawn Display Brighten	発明
1872	『英華萃林韻府』	J.Doolittle (ドーリトル 盧公明)	Dawn Illustrate Illuminate	発明
1882	『英華字典』	I.M Condit	Illustrate	発明

		(コンディ ット 江 徳)		
1884	『訂増英華字典』	井上哲次郎	To bring to light Display Illustrate Brighten	発明
			first appearance of intellectual light	発明者
1899	『華英字典集成』	鄭其照	Illustrate	発明
1908	『英華大辞典』	顔惠慶	Advance Brighten Contrive Devise Discover Find Gloss Illustrate Invent	発明
			Contriver	発明家
			Discoverable	可発明的
			Discoverer	発明者
			Inventor	発明人
			Inventible	可発明的
1913	『英華新字典』	商務印書館	Construct Contrivance Contrive Dawn Develop Enlighten Evolve Excogitate Find Forgery Illustrate Invent	発明

			Invention Lighten Mint	
			Father	發明者
			Indiscernible	不能發明的 ¹³
			Inexplorable	難發明的 ¹⁴
			Inventor	發明之人 ¹⁵
			Legible	易發明的 ¹⁶
1916	『官話』	K. Hemeling (赫美玲)	Define Illustrate Invent	發明
			Discover	(新) ¹⁷ 發明
			Method of discovery	(部定) ¹⁸ 發明 法
			Inventor	(新) 發明家
			Invention	(新) 發明品

表 5 から、以下の結論が得られる。20 世紀以前、「發明」の意味は主に“明るくする”、“説明・解釈する”である。1908 年の『英華大辞典』以降、**contrive**、**discover**、**invent** が現れ、その意味には近代的なものが見られる。これは、前述した『申報』への調査の結果と同じである。「發明」の中国語への逆輸入は、20 世紀以降だといえる。

20 世紀以降に伝えられた「發明」は“発見する”の意味を持たないはずだが、『英華大辞典』(1908) と『官話』(1916) では **discover** と対応する。この理由について説明する。陳 (2012) は、顔惠慶『英華大辞典』(1908) の編集に英和辞書の利用を認めたことを述べている。近代日本語の英和辞書には「發明」と **discover** の対応が多いため、これを参考にした編集の際には **discover** を収録する可能性が高いと思われる。また、沈 (2020) は、『官話』が 19 冊の辞書を参考に編集され、そのうちに『英華大辞典』(1908) があると指摘している。そこで、『官話』にも **discover** が見られるのは不自然でないといえる。

¹³ 筆者訳：發明できない

¹⁴ 筆者訳：發明しにくい

¹⁵ 筆者訳：發明の人

¹⁶ 筆者訳：發明しやすい

¹⁷ 「新」とは新概念を表す語のことである。

¹⁸ 部定とは当時中国教育部の嚴復をはじめに制定された術語である。

5.3 訳書における「発明」

アヘン戦争および第二次アヘン戦争の失敗を受け、清の有識者は、清が世界に立ち遅れたという認識のもと、ヨーロッパの科学技術導入による国力増強を目指した「洋務運動」を展開した。軍事や工業だけではなく、教育分野にも積極的に受容する。最も代表的な機構であった江南製造局に翻訳館が成立された。西洋書籍を翻訳し、「西学」の普及に大きな役割を果たした。本節はこの江南製造局の訳書を調査し、近代中国の書籍における「発明」を考察していく。

筆者の調査の限りでは、20 世紀以前の訳書に「発明」は見られなかった。その代わりに、「初創」や「創」などが用いられる。例えば、以下の例がある。

(27) 歌白尼乃更創新法謂太陽居中心地。(コペルニクスはさらに新しい説を作り出し、太陽は中心にあると言う。)

(アレクサンダー・ワイリー¹⁹口訳、李善蘭、徐建寅筆述『談天』、1881 (光緒 7) 年)

(28) 一千七百七十三年、英人瓦特初創汽器。(1773 年、イギリス人のワットが蒸気機関をはじめて創造した。)

(ジョン・フライヤー²⁰口訳、潘松筆述『美国鉄紀要』、1897 (光緒 23) 年)

一方、中国人学者による著作には、古典的な意味の「発明」がしばしば見られる。例は以下のようである。

(29) 直積回求大旨皆出於四元玉鑑、而実能發明前人不伝之術。(直積回求²¹の大意は『四元玉鑑』に出自し、前人が伝えなかった術を実に説明できる。)

(謝家禾「直積回求」、『算学』、1896 (光緒 22) 年)

以上の (27) と (28) では、“具体的なものを作り出す” “抽象的なものを作り出す” という意味を表す「創」、「初創」が使われることが分かった。しかし日本語の資料においては、これらに似ている文脈の多くで「発明」を使用する。したがって、この時期には“具体的なものを作り出す” “抽象的なものを作り出す” を意味する「発明」は中国語に普及しておらず、(4) のような古い意味の「発明」が引き続き使用されていたと考えられる。

また、20 世紀以降の訳書には近代的な意味の「発明」が見られる。

¹⁹ アレクサンダー・ワイリーは Alexander Wylie、中国名偉烈垂力である。

²⁰ ジョン・フライヤーは John Fryer、中国名傅蘭雅である

²¹ 直角三角形には、 $(c-a)(c+a) = b^2$ などのピタゴラス定理に基づく変形算式がある。

(30) 憲法所予行政之權包羅宏大、無瑣碎之論致礙國家之進步、如民間新發明之製造品亦包括在內。(憲法は行政に与えられた権利は何でも含めている。國家の進歩を阻害する些細な内容はない。例えば民間が新しく作り出した製品も含まれている。)

(舒高第口訳、鄭昌棧筆述『美國憲法纂釋』、1907(光緒 33)年)

しかしながら、20 世紀以降も近代的な意味の「發明」は多くは見られない。その原因は 2 つあると考えられる。1 つ目は、江南製造局が 20 世紀以降に出版した本が少ないということである。2 つ目は、『申報』に比べ書籍は、即時性が低いということである。『申報』は、西洋文化を伝播する媒体として、知識人が書いている専門的な文章を載せ、毎日発行される。専門性が高い文章が多く、発刊が頻繁であるため、書籍より即時性が高いと考えられる。そのため、書籍では新語の受け入れと使用が、新聞より遅れる傾向があると思われる。

5.4 まとめ

本節は影響力が大きな『申報』、辞書と漢訳洋書を調査した。中国語における「發明」は日本語における「發明」の受容は 20 世紀以降であると言える。

19 世紀後半の『申報』においては、「發明」はまだ古典的な意味が主流である。しかし、1905 年以降、「發明」の使用が急増し、その意味は“抽象的なものを作り出す”と“具体的なものを作り出す”の近代的なものが多くなった。これは、20 世紀以降中国人留学生による日本書籍の翻訳作業が高潮に達し、日本語からの新しい表現も大量に現れたことによる。辞書にも、1908 年の『英華大辞典』以降、近代的なものが見られる。20 世紀以前の訳書は「發明」の使用が見られなかったが、中国人学者による著作には、古典的な意味の「發明」がしばしば見られる。この時期には“具体的なものを作り出す”、“抽象的なものを作り出す”を意味する「發明」が中国語には普及していないと思われる。20 世紀以降の訳書には近代的な意味の「發明」が見られるが、数は多くない。これは、江南製造局は 20 世紀以降に出版した書籍が少ないということであることに加え、『申報』に比べて書籍の即時性が低いということによると考えられる。

6. 「發明」をめぐる日中両語間の相互影響

本節では、日中両語間の交流の観点から「發明」の通時的な変化過程を説明する。「發明」をめぐる日中両語間の相互影響は、3 つの段階に分けられる。

第 1 段階 中国語から日本語への伝播

第 1 段階は古典語における交流である。「發明」の出自は中国語であり、儒学書では“説明・解釈する”の意味を多用し、仏典では“悟る”の意味を頻繁に使用する。古代中国の仏典や儒学書などを多く受容した古代日本は、それらの意味を持つ「發明」も使用し始めた。この時期の日中両語は、中国語から日本語へという方向での交流があったといえる。

第2段階 交流の中断

幕末期に入ると、日本は中国の代わりに、オランダをはじめとする西洋文明を積極的に受容し、書籍の翻訳も行なった。「発明」という語は、物理学や化学などの科学分野の翻訳書に使用され始めた。“発見する”“具体的なものを作り出す”という意味が見られ、“抽象的なものを作り出す”ことを意味する「発明」は以前より頻繁に使われた。明治時代になると、西洋文明との交流が一層深まることにより、「発明」の意味における主要な意味が明らかに変化した。具体的には“悟る”、“説明・解釈する”から、“発見する”、“具体的なものを作り出す”および“抽象的なものを作り出す”となった。一方、西洋文明と交流しない中国は、「発明」の意味に大きな変化が起こらない。この時期は日中両語間の交流が一旦停止した。

第3段階 日本語から中国語への伝播

20世紀以降、日清戦争によって中国語は日本語を積極的に受容する。“具体的なものを作り出す”、“抽象的なものを作り出す”という意味は「発明」の主要な意味になり、現代中国語の「発明」とかなり近いものとなる。

以上をまとめると、「発明」に関する日中両語間の相互影響は図2のようになる。

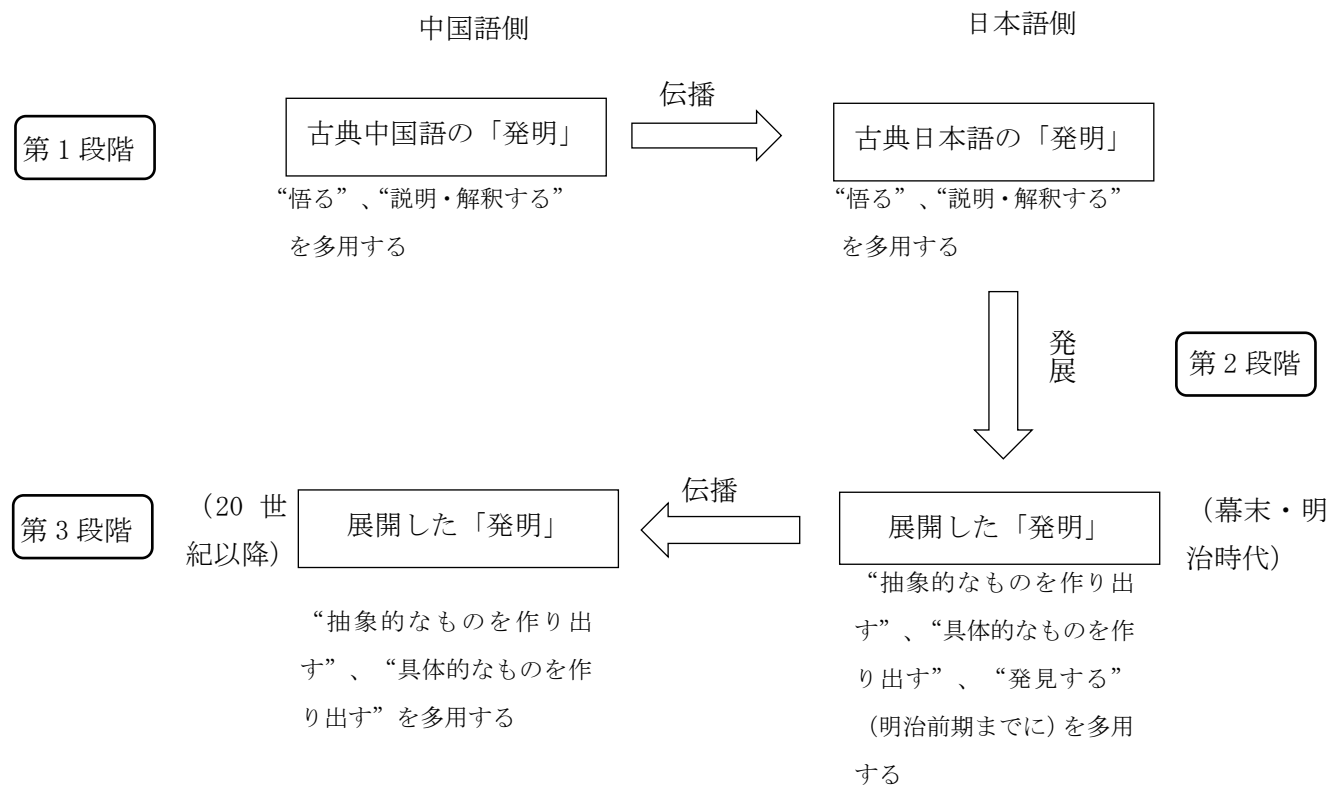


図2 「発明」に関する日中両語間の相互影響

7. おわりに

本研究は、「発明」の語史および日中両語間の交流の観点に立った意味の変化について考察した。「発明」は古代中国で作られた語であり、“悟る”と“説明・解釈する”の意味で多用され、そのまま日本語に伝播した。幕末期には、自然科学の発展の影響を受け、“発見する”、“抽象的なものを作り出す”および“具体的なものを作り出す”を主要な意味として持つようになった。そして、明治時代には、「発明」の意味における主要な意味が明らかに変化し、現代日本語における「発明」と相当近くなった。一方、20 世紀以降の近代中国語では、日本語の影響を大きく受け、「発明」を“抽象的なものを作り出す”と“具体的なものを作り出す”の意味で使用するようになった。

本研究にはまだ課題が残っている。資料の調査に限界があり、日本語側の出自はまだ明確されていない。中国語側における古典語から近代にかけての調査が不十分であると思われる。また、「発明」の意味の変遷には、外部による原因（日本語との交流）があることがわかったが、内部における原因（中国語自体の発展など）はないのだろうかという疑問が残る。今後は「発明」の語史をさらに詳細に考察したいと考えている。

参考文献

- 木村秀次（2008）「漢語「発見・発明」小考：『西国立志編』をめぐって」『国際経営・文化研究』12（2）, 217-232, 淑徳大学国際コミュニケーション学部
- 桜井豪人（2011）『英和対訳袖珍辞書』初版草稿の諸相と蘭書の利用」『日本語の研究』第7巻3号, 17-32, 日本語学会
- 沈国威（2020）『新語往還：中日近代語言交渉史』北京：社会科学文献出版社
- 惣郷正明・飛田良文（1986）『明治のことば辞典』東京：東京堂
- 高野繁男（2004）『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法—』東京：明治書院
- 陳力衛（2012）「英華辞典と英和辞典との相互影響—20世紀以降の英和辞書による中国語への語彙浸透を中心に—」『JunCture』第3号, 78-98, 名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター
- 陳力衛（2019）『東往東来 近代中日之間的語詞概念』北京：社会科学文献出版社
- 永嶋大典（1970）『蘭和・英和辞書発達史』東京：講談社
- 馮天瑜（2004）『新語探源』北京：中華書局
- 山田俊雄（1999）『詞苑間歩 移る時代・変わることば 上』東京：三省堂
- 渡辺万蔵（1930）『現行法律語の史的考察』東京：万里閣書房

「発明」年表

(A) 日本語資料における用例

年代	著者	資料名	文脈
1633 (寛永 10) 年	万安英種	『四部録抄』	已ニ有ハ <u>発-明</u> ^{スルコト} 者
1676 (延宝 4) 年	熊沢蕃山	『集義和書』	子思初て <u>発明</u> し給た るか
1691 (元禄 4) 年	村上次郎右門衛	『大学金鑑抄 7 巻』	周-子ハ易-道ヲ <u>発- 明</u> シテ
1695 (元禄 8) 年	丹岳野必大千里	『本朝食鑑』	(目次) 発明
1706 (宝永 3) 年	近松門左衛門	『卯月紅葉』	<u>発明</u> な町の小娘
1827 (文政 10) 年	青地林宗訳	『気海観瀾』	<u>発-明</u> ^シ 水之原
1837 (天保 8) ～1847 (弘化 4) 年	宇田川榕庵訳	『舍密開宗』第 2 巻	^{ガルバニキ} 瓦爾華尼機ヲ <u>発明</u> シ
1837 (天保 8) ～1847 (弘化 4) 年	宇田川榕庵訳	『舍密開宗』第 3 巻	千七百八十年第三月 ノ <u>発明</u> ニシテ
1873 (明治 6) 年	アーネスト・サトウ	『春秋雑誌会話篇』 第 2 冊	全日本人の <u>発明</u> 為た
1874 (明治 7) 年	加藤祐一	『文明開化』	<u>発明</u> な人
1874 (明治 7) 年	西周	『百一新論』	後世ノ <u>発明</u>
1875 (明治 8) 年	阪口素	『明六雑誌』40 号	重力ヲ <u>発明</u> ス
1881 年	作者不明	『東洋学芸雑誌』第 2 号	採集スルノ法ヲ <u>発明</u> セリ
1888 年	作者不明	『国民之友』31 号	蒸気機関の <u>発明</u>
1874 (明治 7)	西周	『百一新論』	商鞅ナドヲ <u>発明</u> 者
1901 (明治 34)	冶雷町人	『太陽』第 7 巻第 3 号	最初の <u>発明</u> 者
1882 (明治 15)	ジョンダルトン	『東洋学芸雑誌』第 4 号	ソディヤムノ <u>発明</u> 者
1887 (明治 20) 年	池本吉治訳	『国民之友』第 3 号	<u>発明</u> 者

(B) 中国語資料における用例

年代	著（編）者	資料名	文脈
戦国（BC476—221）	宋玉	『風賦』	<u>発明</u> 耳目
432 年	范曄	『後漢書』	<u>発明</u> 章句
南宋（1127-1279 年）	靈隠寺普濟編	『五灯会元』	<u>発明</u> 心地
南宋（1127-1279 年）	黎靖康	『朱子語類』	孟子 <u>発明</u> 四端
1596 年	李時珍	『本草綱目』	（目次） <u>発明</u>
1888（光緒 14）年	鴻宝齋書局啓	『申報』第 5356 号	<u>発明</u> 説文之義
1892（光緒 18）年）	中西大藥房	『申報』第 6976 号	<u>発明</u> 性理
1906（光緒 32）年	済春社	『申報』第 11905 号	新 <u>発明</u> 一種戒煙糖片
1907（光緒 33）年	江蘇教育總會移蘇垣 事務所	『申報』第 12298 号	<u>発明</u> 鑄鐵法
1896（光緒 22）年）	謝家禾	『算学』	<u>発明</u> 前人不伝之術
1907（光緒 33）年	舒高第口訳、鄭昌棧 筆述	『美國憲法纂釋』	新 <u>発明</u> 之製造品